

平成 29 年度 第 2 回 豊岡市総合教育会議（定例会）議事録

○ 開会及び閉会の日時及び場所

平成 29 年 11 月 30 日（木）

場 所 豊岡市役所 3 階 庁議室

所在地 豊岡市中央町 2-4

開会時間 午後 2 時 00 分

閉会時間 午後 3 時 30 分

○ 出席者及び欠席者の氏名

出席者 豊岡市長 中貝 宗治

豊岡市教育委員会

教育長 嶋 公治

委員 深田 勇

委員 中川 茂

委員 佐伯 和亜

委員 向井 美紀

欠席者 豊岡市副市長 森田 敏幸

○ 事務局等関係者の氏名

事務局 教育次長 丸谷 統一郎

教育総務課長 和藤 達也

こども教育課長 能登 琢也

こども教育課参事兼指導係長兼指導主事 飯塚 智士

こども教育課主幹兼指導主事 高田 健一郎

こども教育課主幹兼指導主事 河本 純子

こども教育課主幹兼教育研修センター所長兼指導主事 森山 健二

こども育成課長 宮本 ゆかり

こども育成課幼児教育保育指導係長 仲義 健

教育総務課参事兼課長補佐 正木 一郎

教育総務課教育総務係長 若森 和歌子

政策調整部長 土生田 哉

政策調整課長 熊毛 好弘

○ 日程

1 開 会

2 あいさつ

3 協議事項

(1) 豊岡市のすすめる英語教育について

- (2) 学校現場の業務改善について
- (3) 高校との連携について
- 4 その他
- 5 閉会

○ 会議の概要

----- 開会 午後 2 時 00 分 -----

[日程 1 開会]

(教育次長)

定刻となりましたので、ただ今から平成 29 年度 第 2 回豊岡市総合教育会議を開会します。この会議の構成員のうち森田副市長につきましては、本日出張のため欠席となります。なお、会議で活発な意見が協議できますよう、市長に代わりまして私が司会進行をさせていただきますので、よろしくお願いします。

それでは、会議の主催者であります中貝市長よりごあいさつを申し上げます。

[日程 2 あいさつ]

(中貝市長)

地方創生の中に教育を位置づけて、ローカル&グローバル・コミュニケーションを位置づけてやってきてだんだんわかってきたことは、やはりここだということです。みんな口を開くと教育というものは何時間の体系だとか言うのですけれども、本当に信じているかという、たぶん本当は信じていないと思います。目の前の大変なことがいっぱいあるし、じゃあ何十年間のために今本気で教育をやるかというところまで本当に腹を据えてやっているかという、まちの有り様として見たときに、たぶんそうではなかったのではないかという気がします。それで、地方創生のいちばんの基本のところは、若い人たちというか、社会全体の価値観に関わっている。この今の価値観を変えない限りは、地方創生は絶対成立しないというか、うまくいかない。大きな者が偉いという、この価値観は非常に強く染み込んでしまっていて、それを変えるのはなかなか大変だと。小さくてもいいのだという堂々とした価値観を持った大人たちが増えていかないことには、日本の今の構造はたぶん変わらないのだろうという気をつくづく感じます。その意味ではやはり、今豊岡が進めているローカル&グローバル・コミュニケーションで、ここでいいのだというふうに、選択肢の 1 つとして、つまり土俵に同じ資格を持つ候補者として上がるという、それをちゃんと受け止めることができる価値観を持った、大人の態度を持った子どもたちを育てないことには、たぶん日本は変わらないのかなという気がします。その意味では、今までお互い五里霧中みたいなことをやってきたわけですが、この方向は間違っていないのだということ、そういう非常に強い思いがいたしております。

それから、AI のことを考えたときに、今子どもたちにアートであるとか、そういったことを身に着けさせないといけないということも言っているのですが、あの感覚というものはやはり小さいうちに身に着けないと、もう私なんかの年になってから今更アートについて感覚持てと言われても、皆さんもそうですけれども、一蓮托生ぐらいダメなわけでありまして、書の方

は別として。ところが、今まで書だとか美術だとか音楽に、本当に日本の教育の中で価値を見出してやってきたかと、あるいは、豊岡市の教育でやってきたかという、やはりそこは寒々としているとしか言いようがない。これまでは、なんでそんなことをしなくちゃいけないのかということ、ちゃんと論理を持って説明できるということもなかったのではないかと思います。それがAIの出現ということを見るときに、現実の問題として起きてきている。あるいは、さっきの地方創生でも、ここでもいいのだと言ったときに、アートのああいったものをスッと受け入れて、「ああ、いいよね」と受け入れるようなそういう態度と、小さくてもいいのだという態度は、もしかしたら根っこは一緒なのではないのか。つまり、大きなのが偉いという、言わなければガツガツした精神、それはそれで上昇気流というか、上昇志向と見ればいいのですけれども、そうではなくて、物事を公平にちゃんと見ていくという態度は、ある種成熟した態度なのであって、そういう成熟した態度と、音楽や絵など、そういう腹の足しにならないものを人間の存在にとって大切なものとしてスッと受け入れていく、頭ではなくて。そういったこととか、人間の態度というものは、やはりどこかでつながっているという気がします。そういう意味でいくと、これまで以上にがんばらなくてはいけない気がします。教育委員会の皆様もそれぞれのお立場でさらにがんばっていただければと思います。

よろしく申し上げます。

(教育次長)

次に、教育委員会を代表しまして、嶋教育長よりごあいさつをいただきます。

(嶋教育長)

一昨日の神戸新聞に中高生の読解力が深刻だという話が出ていました。主語と述語の受けをちょっと変えただけで、文脈がもう読めなくなってしまった。その人の最後の文章は何かと言ったら、そんなことをしていたらAIに職業を取られるよと、そういう結びで、今の市長の話と関係してくるのですけれども。学習指導要領が小学校も中学校も変わるのですが、何回もお話ししていますように、今回の隠れテーマは、AIにできない人間らしい学びはどうかということ。

どういうことかという、例えばミサイルを北朝鮮が上げているというような、そういう深刻な状況の中で、大きな問題で言えば日本はどうしたらいいのかということ、食糧の問題・情報や環境などの問題、これは全部正解のない問題です。この正解のない問題を目にしたときに、私はこう思うのだという私だけの考え方ではなくて、他者と交渉しながら、調整しながら意見を提案して、間違っていたらそれを修正するという、これは絶対AIにはできないことだと、そういう人間らしいような学びをするためには、どういう教材でどういう教科書でどんな教育をしたらいいのかというような、そんなシフトになっています。

その中で出てくるキーワードが「対話的な学び」というものです。主体的で対話的であろう。実はこれはこの前、平田オリザさんとお話をしていたのですが、豊岡はすでに進めていて、それを後追いのように国がやってきたのだと笑ったのですけれども、本当にそれをやるとどんなことが起こってくるのかということ、私はこの4月からずっと学校現場を見ていく中で、その方向性の確かさというものの確認をしてきています。対話するためには、先生がチョーク&トークでいつも講義式にやっている、そういう授業ではダメだ。何をしたらいいのかと言えば、

子どもたちに話し合わせる場、グループやペアの場を設定しよう、そんなことをキーワードとして入口としてやってきたわけです。

そうすると、例えば昨日豊岡南中学校に行きました。私は10年前に豊岡南中学校に行ったときには本当に殺伐とした環境で、子どもは途中で飛び出すし、寝ているし、違う本を持ってきて読んでいるし、その対応に先生たちは大わらわでした。その時に私も入って、グループで話し合いをするような活動をしましようと言ったのですが、なかなかそのことが学校に受け入れられなくて、ずっとそのかたちでいて、たまたま心ある先生がそれをやろうとしたら、男の子と女の子の机の幅がこれぐらいあって、机を動かすのに足でやっているというような、本当にそんなかたちでした。それがここ数年、ずっと対話的であろう、コミュニケーションを大事にしよう、グループやペアを活用しよう、先生たちもアクティブにやっとういこうと言い続けた結果、昨日見ると、本当に男子と女子が仲良く、ペアで音読をしています。ペアで英語のクエスチョン&アンサーをしています。ペアで歌を歌っています。ペアで話し合いや実験をしています。当たり前のようにできていて、それで何ができるかという、ほんわかとした温かい関係性の中で授業ができる。それが学校づくりにつながって、本当に問題はありませんと、そう校長がおっしゃっていました。それは豊岡南中だけではなくて、日高東中に行っても同じことです。日高東中に入ってきた1年生が発達課題を有していて、とんでもないような状況でした。それがとにかく授業を大切にして、学び合いをさせようとして、3年生になったときの授業を見ると、その子が女の子と対話をしながら、ニコニコして「わかった」というような場面が出てきています。やはり幸せな学級ができています。

私たちはこれを中学校だけでやろうとしても、私が失敗したように無理があって、小学校でやってきて、そのことを小中一貫という枠組みの中で、小学校文化を中学校の先生たちが学ぶことによって、「本当だ、こんなふうになればできるかもしれない」手応えを持ってそれをやってきた。その結果が今あるのだろうなと思います。今日お話ししていただくのは、今、ローカル&グローバルの中で1つの大きな手応えはあるのですけれども、英語教育があります。これもよくよく考えてみると、幼稚園や保育園や小学校はどうなのかということも皆やっていたのですが、ゴールはやはり自分のことやふるさとのことを英語を使って堂々と誇りを持って学べる子を作るのだ。そのためには、中学校も変わらなくてはいけないことに授業を見ながら気づいてきたわけです。それを小中一貫の枠組みの中で、対話的な学びが成功したかのように、同じことをその枠組みをするにはどうしたらいいのか、今どんな問題があるのかということも皆さんに協議していただいて、いい方向に持っていけたら、これもやはり成功するのではないかと思いますので、ぜひとも今日はよろしくお願ひします。

[日程3 協議事項]

(教育次長)

それでは、協議事項に入りますが、内容につきまして補足説明をするために、担当部署からの職員が出席しておりますので、ご了承ください。

(1) 豊岡市のすすめる英語教育について

では、協議事項、まず始めに教育委員会より議題として、先ほど教育長からもありましたように、豊岡市のすすめる英語教育について提案がありました。教育委員会事務局から説明をお

願います。

(こども教育課主幹兼指導主事)

「豊岡市のすすめる英語教育について」資料1をお願いします。よろしくお願いします。英語教育については、先ほど教育長からもありましたように、英語でふるさとのこと、自分のことを語る児童生徒の実践を目的として、園での英語遊び保育を受けて、小学校1年生から9年間の系統性と連続性のある学習に取り組みます。平成27年度・28年度はモデル校区で実施し、今年度から全市展開をしています。平成27年度・28年度のモデル校区での実施では、アクティビティーなどを取り入れた授業実践、ALTを活用した授業実践、また、英語遊びカリキュラムシートの作成などに取り組んできました。

2年間の取組により、モデル校区では英語の学習への興味関心の高まりや、ALTを含めた外国人とコミュニケーションを取ろうとする意欲の向上が見られるとともに、子どもたちにおいては、授業外でも進んで表現しようとする児童が増えてきました。しかし、本格実施に向けて課題として、子どもたちがALTから学ぶ時間を確保したり、また、学ぶ時間を継続する、続けていくといった必要性がある。また、担任やALTの授業力を向上させる必要があるというようなことが課題として挙げられました。全小学校でのALTの配置、また、授業力向上のための研修、また、英語遊びサマースクールを実施することを対応策として、今年度より全市展開をすることにしました。

2ページをお願いします。今年度の取組として、園のほうではとても積極的に、「英語だいすき」「もっとしたい」という気持ちを育むことを目的として、All Englishで、歌・ゲームや読み聞かせなどの内容が実施されています。All Englishには、初めに戸惑いながらも喜んで活動している姿や積極的に単語を発音している姿が見られているようです。また、生活の中でも英語を使って話している子も増えてきているというような状況があるようです。小学校においては、やってみること、話すこと、聞くことに慣れ親しむことを目的として取組を進めています。モデル校区でも実践したように、ALTとともにアクティビティーを通して楽しみながら学習するとともに、授業の中で学習した表現、学んだ表現を活用する場面を位置づけたりしています。授業外にも掃除・給食・休み時間など、ALTと触れ合える時間、学ぶ時間を設定し、コミュニケーションを取りながら言語応用力を高めるようにしています。

小学校においては、モデル校区での成果だけではなくて、学習外でも進んで英語を使ったり、教えたりする姿が見られるようになってきています。また、学校によっては校内放送を英語でするといったことに挑戦している学校もあるようです。

3ページをお願いします。一番上に挙げている表は、中2を対象とした実態調査です。質問内容としては、「連続3日間の市内イングリッシュ・サマーキャンプに参加したいですか」という問いですけれども、この問いからAll Englishでの活動に興味を示した生徒が半数以上いました。小学校からの外国語活動や中学校での学習によって興味を示したのではないかと捉えています。しかし、そこだけを見るのではなくて、参加したくない生徒が151名、約4分の1おり、その理由として「英語は苦手である」「嫌いである」と、英語に興味を示さない生徒が中2の段階にいるということもわかってきました。中学校での実態を英語科の担当教師によって聞き取りをしたのですけれども、やはり高校入試では8割程度が文法であったり、読解であったりといった、書く・読むというもの、それから、2割程度が聞くということが問われることも

あって、そのために授業は小学校のような体験的な活動とは違って、語彙や文法の習得が中心になる傾向があります。また、教科書の中には、学んだ学習を活用する教材が設定されていますけれども、十分な教材研究に取り組めていない実態もあります。全単語数の多さであるとか、内容の難しさ、先ほど教育長から、ペアや対話などの学習形態も増えてきたということもありましたけれども、まだ習得中心の授業であるなど、小学校との違いが大きく、初期のつまづきによって英語に対する意欲を失ってしまうということが挙げられるのではないかなと思っています。

英語教育を少しずつ進めてきましたけれども、先ほど教育長からもありました、小学校と中学校の系統的な指導という視点での授業研究や実践、また、学んだ英語・言語を運用するといった言語活動という視点での多様な学びの場が学校内にも学校外にも十分でないといった課題が見られると捉えています。これらの課題を改善していくために、中学校の英語の授業の改善のための研修を充実していったり、授業を生徒が生活の中で英語を活用していく場面を提供し、英語に親しみ、英語でふるさとや自分のことを語ることができる子どもたちを育てていくようにしていきたいと思っています。

(教育次長)

教育委員会事務局からの説明は以上です。まず市長からこうしたことにつきまして、質問・ご意見がありましたらお願いします。

(中貝市長)

着々と成果を上げそうな様子ですね。中学2年生のアンケートの結果は、これまでの英語教育の課題がそのまま表れているとしか…

(中川委員)

それと、小学校で今 ALT に指導を受けているような授業を経験していない子も中2だというでしょうし。

(中貝市長)

この割合はいずれ小さくなると思うけれどね。時間が経ってくると。それまでの子がかわいそうですが。

(中川委員)

今言われたように、この資料で問題なのは3ページです。中学校でサマーキャンプを希望する生徒が半数以上いる反面、行きたくない子がいるということ、そこがやはり問題だと思うのです。それはなぜかという、さっき私が言った理由と、今現在の中学校の授業が、こちらが狙いとするような授業になっていない。テキストの中ではコミュニケーション能力を育成するような場面とか、楽しい部分とかが入っているのですが、やはり中学校の先生は高校入試、そこに目がいつてしまって、なかなかそういったものを授業に取り込めていないという課題があります。この点については、教育長も意欲的に取り組んでおられますし、豊岡南中ではまさに、私も一緒に学校訪問に行ったのですけれども、手紙の書き方の授業が行われていました。それ

はびっくりしたのですけれども、徐々に市長が言われるように変わってくると思います。保育園もそうだし、小学校もサマーキャンプをやっている。だから中学生についてもぜひイングリッシュ・サマーキャンプは、実施させてほしいです。

(深田委員)

今のお話の中でも出てきていますし、それと、資料の2ページのところにある小学校の目的のところ、(2)ですが、それぞれ学校教育の中における英語教育というか、外国語教育の習得すべき目標は異なってくるのは当たり前だと思うのですけれども、大きく変わっていく段差が小学校段階と中学校段階のところですよ。4つの技能の習得ということで、「読み」・「書き」というのが中学校には入ってきます。そのあたりのところで、大きな壁みたいなものが英語教育のつながりの中に出てくる。今までは、小学校はまだ実施段階の途中ですけども、ほとんどが「聞く」、それで自分で speaking「しゃべる」というような中で、綴りが間違っているとか、ちゃんと読めないとかいうようなことを問うものではなくて、これこそコミュニケーションの原点を大事にしようという考え、そういうのが英語教育、外国語教育の中にある。高校の英語・外国語の指導要領の目標の中にもあるのは、ひと言で言ったら、「コミュニケーションを図ろうとする態度・能力の育成」というのが高校の英語教育の目的ですよ。そう書いておきながら、コミュニケーションを取ろうとすれば、その大きな壁になる、中学校の英語の実態というのは3ページのところにありますように、8割が書く・読むで、2割程度が聞く、と書いてあるように、高校などはもっと多いようです。そうすると、今までのような高校・大学入試ということ言えば、実態に合わない今の英語教育と社会の求めているものの実態の乖離が大きいという中で、高大接続の入試そのものも、今までの入試ではダメだということで、TOEFL とか英検等を積極的に導入していこうということになっています。そういう意味では、市長も教育長もおっしゃっていたように、方向性は間違いがなくて、教育長ははっきりと「方向性の確かさを感じることができている」とおっしゃっているように、今の私たちが目指す豊岡の英語教育の方向性は間違いはないけれども、実際に効果のある、目に見えるものとしていくには、何が課題なのかということになります。

それは大きく課題2つに集約されていると思います。基本的にはその2つの集約で間違いはないだろうと思います。換言すれば、小中の連携を英語教育の中でどうしていくのかということ、もっと言葉を変えて言うならば、英語で何ができるかということ、小学校から中学校へどうやってつないでいくのかということだと思います。もう1つは、言語活動という視点では、多様な学びの場の設定というのは、英語環境の整備ということだと思います。その英語環境の整備ということになれば、どんな方向で英語環境の整備をしていくのかということは、現場の先生もさることながら、教育委員会の中でも考えていかなければならないことだと市長もおっしゃっているのだと思います。その英語環境の整備ということ言えば、外国人の指導助手の方、ALT の配置などについても努力はいただいております。けれども、そういう人たちと同時に、地域におられる外国生活をされてきた経験者とか、免許関係なく、ネイティブ人材をどうやって受け入れていくかについて、支援をしていただくようなことも整備していかなければならないと思います。

本市にとってすごくいいのは、コミュニケーション教育を取り入れている点がすごくいいと思います。コミュニケーション教育が目指すものは、ある意味では英語教育の中で言われてい

ることの一環でもあると思います。それを英語というツールを使いながら、自己を表現するということですので、そういう意味では、子どもたち自身が自分でできている、英語でもこういうことができているということを感じさせる、そういうものをどうやって作っていくかということのをこれからの課題にしなければいけない。そういうものが教育委員会での話や教育長が話されていること、こども教育課が目指しているようなところかなと感じています。

(中貝市長)

コミュニケーション教育だというところがたぶんミソなのでしょうね。本当は文法だとか論理性というのは、どこで養われるかという、たぶん会話の中、コミュニケーションから出てくるのではないかという気がします。目の前は1対1もあれば仮想の人物とのコミュニケーションというもあるわけで、結局自分の言いたいことが正確に伝わるかどうかとか、何をそもそも伝えたいのかという、そこがベースになるので、実は成績のいい子を狙っているわけではないのだけれども、英語というツールの中でのコミュニケーション教育ができれば、たぶん成績がよくなるだろうと思うのです。

(佐伯委員)

中学2年生を対象にしたアンケート調査で、「参加したくない」「どちらかと言えば参加したくない」という子も結構いるのですが、これはたぶん中学になってほとんど初めてぐらいに英語に触れて、それがコミュニケーションではなく、文法や難しいものに最初に出会ってしまったので、拒否反応が出てしまっているという生徒さんも多いと思います。このイングリッシュ・サマーキャンプは、そういう子どもさんたちだからこそ参加して、文法だけじゃない、英語はこんなふう楽しく会話として使うことができるんだよということを体験で教えてあげるのがすごく大事ではないかと思います。そのキャンプの3日間がその人たちが楽しいと感じられる場になってほしい。だからこそ、参加して楽しんでいただきたいなと思います。

(中貝市長)

その前に、参加するという気持ちにどうなるかですね。

(向井委員)

私は、半数は行きたくないと思っているけれども、半数は参加したいと、そういう気持ちを大事にしてあげたいなと思います。経験というのは、子どもにとってすごく大きくて、1つの経験でステップが大きくなるので、半分の行きたいという子の気持ちを大事にしてあげたいと思います。

(中貝市長)

それもそうですね。行きたいという子はぜひ行ってもらって、ぜひやろうということです。ただ、そうでない子たちをどうしたらいいかなんですが、アルクという英語教育をやっている会社があって、もう豊岡にだぶん入り込んできていて、西村屋と組んで従業員の英語教育のプログラムを作った。これはもちろん英会話一般ではなくて、旅館の従業員が話す会話というのは、その世界独特のものがあって、それはどういう英語のプログラムを作るかわからないの

で、従業員とずっと話をしながらプログラムを作り上げていって出来上がった。それが西村屋でやっていくものですが、豊岡でも取り組みましょうみたいにやっていますけれども。文法が違って何しても構わないとは思っていない人はかなりあるので、それをどう崩すかをやらないと、プログラムができましたと言っても人は入ってこないという、こういう話を彼らはやっています。アルクという会社、そこは得意なのですと、自分たちは。まず最初にアイスブレーキングをやるところが実はすごく大切で、そこがわかると、書いてあるプログラムに入っていくという、それと同じような作業というのか、努力がいるのかもしれないです。

(嶋教育長)

そのプログラムに城崎小か中かが乗っているのでは。今年何人が参加して、旅館の人たちを対象にした後、時間を取っていただいて、同じようなプログラムで練習している。そういうことが本当に効果があるのであれば、例えば授業の一部のことを生活の中でもそんなことができるような場面設定というのは有効かもしれないですね。

(中貝市長)

今、専門職大学では、平田さんはアルクになんとか関わってもらえないかと思っておられる。専門職大学はまだ全然かたちをとっていないのだけれども、平田さんが検討委員会の座長で、この間、根を詰めてカリキュラム、案を作って、これからコンサルがそれを少し整理するという段階にきています。今だいたい考えているのは、1学年100人ぐらい。あくまで「ぐらい」。4年生で400人、そのうち20人は留学生を取る。ということは、80人の留学生をいろいろな国の言葉を使う人たちがやってくるでしょう。もちろん、日本語をちゃんと教えないといけないので、日本語を教えるという先生もいるのだけれども、他方で英語での授業もやらないといけない、日本人の学生相手に。その時に今申しあげたようなことが、やはり最初に出てきちゃうことなので、最初のアイスブレーキングだとか、その後のプログラム作りをアルクに出してはどうかということをおっしゃっている。あの社長はなかなかの人物でしたね。こういうものができてくると、今早ければ2020年、遅くとも2021年に開学ということを書いていて、知事も今2020年で出すと、ただし、事務的にかなりしんどいことはしんどいので、その場合でも2021年には開学をすとおっしゃっています。その教師陣の力を借りることは、たぶんかなりできるということです。その辺で一気に展開できるかなと思います。80人からの留学生を毎年毎年入れるとすると、子どもたちが触れる機会ってもっと増えますよね。聞き取りやすい英語をしゃべるのもいいけれど、何を言っているのかさっぱりわからないような英語をしゃべるようになったりして。非常に多様性に富んだ社会の中に豊岡の子どもたちがいることになってきます。

(嶋教育長)

この前も平田さんがその教師陣を小中学校に送り込むことは可能ですよとおっしゃっていました。

(深田委員)

英語教育自体が時代のすう勢というか、そういうようなもので変わってくるのは当たり前だ

と思います。明治以来の日本の外国語教育というのは、特に普通科教育の中においては、舶来ものが1位にいて、その勉強についても、いろいろな知識についても舶来ものが1位、だからその舶来ものを手に入れるためには、古典の英語をちゃんと読まないといけない。そして、その真意をしっかりと読みとらないといけない。そうなる、こういうスピーキングではなくて、文法は大事だということに重きを置くようなところがあったけれども、すでにそんな時代ではないわけで、知識・記録だけで言ったらAIのほうがもっともっと優れた能力を発揮するわけだから、私たちが子どもたちにこれからはちゃんとつけていかななくてはならないのは、英語のスペルが間違っていようが、自分の思いをきっちり英語で語れて、お互いにコミュニケーションを持ちながら、お互いにいいところをしっかりと補完し合えるような、そんな社会を作っていくための英語教育ということになっていくのだらうと思います。一部としては確かにそういう学者さんも必要だと思いますが。

(中貝市長)

平田さんの劇団員に東大卒だったか、医者で劇団員がいて、豊岡に移り住んで来て、豊岡の病院に勤めながらやっている人がいるそうです。それから、MITのMBAを取って、民間の企業でバリバリやっていたのが、平田さんの演劇を見て感動しちゃって、会社を辞めて平田さんの劇団にいる。その人は豊岡に移り住むとおっしゃっているそうです。本当に変わっていると言われていたけど。けど、MITとか東大だとかに行っていたのがさっさと辞めて、すごいのが目の前にいて劇団員をやっているというのを見ると、子どもたちにとってはいいと思うのです。そんなのでもいいのだという感じ。医者になったのが劇団に来たときには、これ以上のハイレベルの子は来ないだらうと思ったら、そのさらに上が来たと言っていました。

(深田委員)

今、市長が話されたような取組というのは、価値観の転倒ですからね。これは明治以来の日本の社会の中でずっと作ってきた価値観をひっくり返そうという話で、そういう中では、尋常なやり方ではなかなか変えられないところがあると思いますので、多くの人から見たら、これは一種変だなというところが必要なのかもしれません。

(教育次長)

教育委員の皆様方、いろいろと学校現場を見ていらっしゃると思いますが、そうした中で、この中2の子はどういうことをして、これから数年後の行動をイメージして、見てこられて何か感想とか、そういうことはございませんか。

(中川委員)

思うことはあります。我が家でも孫が2人いて、下は小1の女の子で、上が小5の男の子です。学校から帰ってきたら2人で話をしているのだけれど、夕食のときに私がいるときでも、2人で一緒に「いただきます」って言うんです。同じことを言うのです。ところが、発音を聞いていると、下の女の子のほうがどちらかと言うと英語っぽい発音。下の子は保育園の時から英語遊びなんかでやっている。上の子は、保育園は全くなくて、小学校でも4年生ぐらいで始めてくれたのかな。「ほうっ」と。上の子には言いませんよ。どうだとは言わないけれども、そ

れを見ていると確実に英語力というのは、早ければ早いほど身に着くのかなと思っています。だから、これからの、今の豊岡市に大いに期待しましょう。

(中貝市長)

あとは途中で転校してきた子をどうフォローするかということがあります。

(嶋教育長)

小学校から中学校に上がるときに、確実にこれがネックになって英語嫌いになるというのがわかっているのです。これで、それを小学校で補填しようとしているのですけれども。何かと言ったら、日本の文字は表音文字ですから、「あいうえお」は書いたら読めますよね。ところが、アメリカはそうではなくて、Aでも違う読み方がいろいろある。だから、BOOKもO“オー”と言ったらOO“オーオー”のはずなのに、“ウ”となるのはなぜだと。そこに戸惑いがあるって、そして、書けない、読めない。それをフォニックスという考え方、セサミストリートが昔ありましたがあの考え方で、Bを使う文字をいっぱい並べて、いろいろな表音があるのだということをすることによって単語を習得するという、この考え方をに入れていっただけでいぶん負担が軽くなるということ。いっぱいそういうことがこれから入るのですけれども。そのところさえ上手に遊びながら、そしてアクティビティーを入れながらやっていると、私はずいぶん中学校に入ったときにそのスロープが緩やかになるのではないかと思います。その後、書くことに重きを加えていったら、ある程度、私も中学校の英語の先生をする、それを全部1学期の間にやります。2学期に入ったら突然三単現のSが出てくるので、ガターッと英語嫌いが生まれてくるという。そういう構造なのだということを教員が知りながら英語をやっていると、ずいぶんそれが変わってくるだろうなと考えます。

(中貝市長)

面白そうだな。

(教育次長)

教育長、よろしいですか。中学の英語をどう変えるかという何か、今言われたことで。

(嶋教育長)

それで、確かに教科書にもあるのだけれども、GETという習得する単元と、USEという使う単元とあって、そのUSEという単元がかなりおろそかにされているという実態があるので、そこにこれからテコ入れをしていきます。それに積極的に向かっていく教員が少なからずいますので、そういう人たちをモデルにしながら、お互いに授業をうまく、小さな学校で1人しか英語教師がいないのは本当にかわいそうで、それが出かけていって、モデルになるような、活用型、言語運用をするような授業をどんどんやっていって、そこで授業力を改善させる。一方では、外で本当にそれが使えるかという、先ほどの城崎の実践であるとか、あるいは、教育委員会がこれからセットしようとしている、イングリッシュ・サマーキャンプ等の外で体験的に英語を使うというのをセットしながら、そこに向かって先生たちも授業を考えていくというような、そういう1つのストーリーを描いていますので、それをこれからやっていこうと思っています。

(教育次長)

豊岡市のすすめる英語教育については、意見も出尽くしたようですのでこれで終わらせていただきます。

(2) 学校現場の業務改善について

(教育次長)

続きまして、前回の総合教育会議でも議題になっておりましたけれども、「学校現場の業務改善について」を議題にしたいと思えます。この件につきまして、教育委員会事務局から説明をお願いします。

(こども教育課長)

資料No.2をご覧ください。「学校現場の業務改善について」です。教職員の勤務時間につきましては、様々な対応に追われ、時間外の長時間勤務の実態があるというのが今年度特に新聞等でも報道されているところです。本市におきましても、1つ目は、児童生徒と向き合う時間を確保して、教育の質の向上を目指す、もう1つは、教職員自身のワークライフバランスの実現をして、これからも持続可能に授業や学校運営に励んでいけるように、ということで学校現場の業務改善が急務だということです。

1番目の教職員の勤務時間の適正化についての通知ですが、本年度4月に、そこにあります3点について教育委員会から学校に依頼をしております。1つ目は、定時退勤日、ノー会議デー、ノー部活デーの完全実施を目指してください。2つ目は、先進事例集というのが今年度県から新しく出ました。いろいろなところで取り組んで効果のあった事例が1冊の冊子になっております。それを活用して、各学校の実態様々ですので、実態に応じて1つでも2つでも実効性のある取組を推進してください。3つ目は、組織として先生方自身が主体的に取り組める、そういった体制を作る、そして、先生方の意識改革、タイムマネジメントの確立を進めてください。この3つの方針で今年度進めております。

2番、学校現場における取組状況です。調査をしたものがありますので、調査結果から拾っております。(1)「定時退勤日」の実施状況ですけれども、設定状況につきましては、すべての学校で週1回以上設定しております。実施状況については、右のグラフのとおり半数程度しかできていないというのが1校ありますが、それ以外ほとんどの学校では完全実施、あるいは、ほぼ実施できています。ただ、②の設定時刻のあたりが問題で、多くの学校は設定時刻を18時から19時に設定しております。勤務時間は実際には17時までには終わっている状況ですので、この曜日はみんな早く帰ろうと取り組んでいただいているのですが、現実には定時退勤といっても定時ではないというところは、非常に難しい状況ではあります。続きまして「ノー会議デー」ですけれども、そこにありますとおり、すべての学校で週1回以上設定して、完全実施、あるいは、ほぼ実施できているという状況です。2ページの「ノー部活デー」です。「ノー部活デー」につきましても、これは中学校ですけれども、すべての中学校で平日に週1回以上、それから、土日に月2回以上設定して、完全実施、あるいは、ほぼ実施できているという状況です。(4)の校務のIT化の状況です。⑥の校務支援システム以外はそれぞれの業務について、ほとんどの学校で独自にITの得意な職員がエクセル等のソフトを使ってシステムを組んだりし

て、一定の効果は上げております。ただ、ITの苦手な職員には使いにくい、ミスが生じやすいということ、それから、そのシステムを作った職員が異動したりすると、不具合やそのシステムの改修・変更が難しいというような状況が生じております。(5)の学校ルールブックの作成と活用、これも全校で取り組んでいただいております。昨年度、重点的に全校で作成を依頼して作っていただきました。服務に関する手続きであったり、設備や備品の管理とか使用、故障の管理、保存等、いろいろな学校の中のルールを1冊にまとめて、異動してきた職員等にもわかりやすく、それを見ればわかるというようなものを作っております。(6)の共有フォルダの活用については、学校のサーバーの共有フォルダを活用しまして、それぞれ先生方個人が所有している学級経営であったり、学習指導に関するいろいろな情報の共有化を図って、教材とか資料とか、そういった準備の効率化を目指しています。特に若い先生方などは経験が浅いため、授業準備等、そういった既存の先輩が作った資料等を活用できるというあたりで、時間短縮に効果があると考えられます。(7)の校内会議の見直しと効率化につきましては、①は、毎朝の職員朝会を廃止したり、週に1回や2回と回数を減らしたりとか、それから、②の職員会議のところでは、時間短縮の工夫をしたり、③の職員会議のペーパーレス化については、先生方にはパソコン1台ずつありますので、その画面のデータを見ながら会議をするというようなことに取り組んでおります。それによって資料を印刷したり、調製して配ったりとか、そういう手間がなくなるというようなことで負担軽減できたり、印刷コスト等の縮減にも役立っているということです。(8)の外部人材の活用の促進につきましては、環境教育等の授業で外部指導者をお願いしたり、図書ボランティアとして、PTAの方等に図書室の整理等をお手伝いしていただいたり、読み聞かせのボランティアであったり、それから、校内の環境整備のボランティアと、様々な外部の方々にお世話になっています。ただ、学校としましては、助かる部分もありますが、外部の方との連絡調整の業務というのが新しくそこで発生しますので、そういった調整をする、たぶん教頭先生方の負担が増える場合もあるということで注意が必要です。3ページ目になりますが、(9)一斉メール配信システムの導入です。これはすべての学校ではありませんけれども、PTAなどの支援でこういうシステムを導入している学校もあります。運動会など気象に左右されるような学校行事の変更の連絡であったり、気象警報が発令したときの緊急連絡等で、今まででしたら問い合わせの電話がひっきりなしに朝からかかってきたりしていたのですが、そういった問い合わせの電話や市民からの問い合わせ等もほとんどなくなったと聞いております。(10)教職員の意識化ということで、そこに写真を1枚掲示しております。これはある小学校の例です。今年度から、先生方の業務改善に対する意識化を高揚するためにすべての学校で重点目標を決めて、職員室にこういったポスターを掲示しております。

このように学校現場では今年度はかなり本気で、いろいろな取組をしていただいて、業務改善に取り組んでおりますけれども、なかなか本格的な解決にはまだまだ課題が多いのが現状です。そこで、3番目、学校業務改善にかかる今後の課題等ということで5つ挙げさせていただいております。1点目は先ほどから出ておりますけれども、2020年度から全面実施となります新学習指導要領、そこでアクティブラーニングの実現に向けて授業改善を進めるということが求められています。それから、道徳の教科、小学校の英語等、新しい教科が導入されて、小学校では授業時間が増えるというようなこともあります。加えて今年度から始めましたローカル&グローバル学習については、豊岡独自の取組で、ふるさと教育、コミュニケーション教育、英語教育等の実践の質の向上をこれからも求めることになってきます。先生方にはこういった

取組に対して、しっかりと教材研究や研修をしていただける時間を確保することが重要だと思っております。

2点目は、そのためにもさらなる業務の効率化が必要であろうということで、統合型校務支援システムの導入を検討していきたい。それを契機として、先生方の仕事の進め方も見直すことが必要なと思います。

3点目は、ただ効率化をいくら図っていても、これだけ学校現場が忙しくなった状況というのは、いろいろなことが学校に求められてきて、どんどん学校の求められる機能が増えていったという現状がありますので、足し算の思考ではいつまで経っても改善しません。ある面では思い切って引き算の発想で、今までやっていた行事や研修とかを精選していく。それから、学校が担うべき業務というのを明確にして、そこに先生方が専念できる環境を作っていくということが重要と思っています。そういった意味で、地域や市民、保護者の理解を得る必要がありますけれども、地域行事やPTA行事等にも土日、先生方が年間かなりの日数参加していただいている部分があります。重要な部分でなかなか学校としてもこれは削れないのですけれども、こういったことの負担軽減も工夫をしていく必要があると思っています。

4点目は、県や市からいろいろな調査や依頼や指示をしているわけですが、そういったものについてもスクラップ&ビルドの視点から、精選と合理化を進める必要があると考えております。

最後に、教職員の意識改革というところで、やはり今でも先生方の中には、遅くまで残って仕事をがんばっている人、子どものためにたくさん、長い時間働いている人ががんばっている人だという意識があるのではないかと思います。そういった先生方の意識も変えていくことが必要だと考えております。それから、前からやっていることということで、伝統や前例を大切にしながらやっておられるところもあります。そういったことも本質的な有効性を改めて問い直していくというような、学校の中でもまだまだ努力していかなければいけないところがあると思っています。

(教育次長)

説明は終わりました。市長から何かこの件について、質問・ご意見はありますでしょうか。

(中貝市長)

学校現場で実際に先生たちはどういう動きをしているかということのを徹底的に調べたことって、文科省もないのかしら。アンケートを取ったりとかしているのだと思うのですが、客観的な観察者があって、どういう動きをしているかというのをチェックしていないのかな。

(こども教育課長)

学校以外の方が入って働き方がどうであるというような。今のところそういったことはやっておりません。

(中貝市長)

本当は文科省も兵庫県教委もしないといけないという気がするけれどね。豊岡の旅館がやっただんです。旅館にリクルートが入って、それで従業員がどういう動きをしているかを徹底して

調べて、どこが改善できるかというのを提言して、今それでいくつかの旅館と市も入って、働き方改革を始めているのです。タスキ掛けというのがあの世界の特色で、タスキ掛け勤務というのだそうです。だいたいお客さんが来るのは午後、ゆっくりめに来るので、そこで「いらっしゃいませ」と言っている従業員が迎えて、部屋に案内して、「晩ごはんは何時にしましょう」「お布団は何時に敷きましょうか」と聞く。「明日の朝は何時に食べますか」と言っている、8時とかだったら、また朝に「おはようございます」と言って、同じ人物がそののところにまたご飯を出して行って、布団を上げて「ありがとうございました」と見送る。見送ってから、また3時か4時にお客さんが来るまでの間が仕事はない。労働時間は計算上合っているのだけれども、拘束時間は圧倒的に長い。給料は安い。こんなところにいったい若い人が来るのかという話があって、調べてみると、だいたいリクルートが見てびっくりした。なんでタスキ掛けがいるのですかと。午後に迎える人がなぜ朝同じ人がご飯を出さなければいけないのだと言われてみたら、理由は何もない。昔は心付けとかがあったから、そういうこともあったのかもわからないけれども、今はしないです。そうすると、これ分けたらいいじゃないと、単純に。もし、タスキ掛けでも夕方迎えて朝までいるとすると、よほど高いお金を払う人。そういうサービスを要求する人で、実際それだけの5万だとか10万だとかを払う人には、「あなたが担当よ」と言ってきっちりやって、その代わり給料はちゃんと払うと。そうでなければ別に2交代制でも構わないのではないか。その間にそれぞれがどんなことをやっているかということ、ここは1人の人間で両方カバーできるということがあったりとか、それから、あるところでは、“今日のお客さん”みたいなことをずっとホワイトボードに書いていく。それをみんなが写して行って、この人は3年前に来たときに香住鶴を飲んでいきましたみたいなことを書き写したりする。それって他にいくらでもできるわけです。そういうふうに変えて、ITを使ってやってしまうと、そんなこと全く時間がいらなくなってしまう。より正確になってきて、3年前に来たときに香住鶴の何というのを飲んだのかわかるわけで、サービスの水準がよくなるという、そういうことをもうすでにやっているところは現にあって、そこは従業員に英語の教育もやっているし、全然採用には困ったことがないと。他のところは、そういうところがあることを知って驚いて、今いくつかの旅館が働き方改革をやろうとしている。もっとリーズナブルな労働時間で、よりサービスの質を上げて、さっき言ったように「3年前にお越しになったときに、このお酒大変お好みでしたから、これはいかがでしょう」と言うと、そういったことを通じて、なんとか上代を上げていく。もちろん、コスト削減できると思うので、削減したものをちゃんと従業員と経営者とかが分かち合うようなかたちにしていくと、給料も上がって労働時間は短くなって合理的になって、しかもお客さんが喜ぶのでやりがいがあるという、そういうことを今やろうとしています。

学校現場もたぶん感覚的にはいろいろなことがわかっていると思うけれども、実はそういう冷静な目で見ると、気づいていないことがいっぱいあるのではないかと思います。本当はそれをやらないといけないと思うのだけれど。豊岡でやってもいいと思うけれども、本当はそれ日本中に共通することだからね。

(深田委員)

先ほど話に出てきましたが、勤務実態の調査は、教頭に関する勤務実態調査を広島大学等がやっているというのを聞きます。教職員の勤務実態の調査はあまり聞かないですね。

(嶋教育長)

勤務実態調査ってやっているよね。

(こども教育課長)

それは県でもうちでも何年かに1回はやっています。

(嶋教育長)

抽出で。全部ではないです。

(中貝市長)

それは誰がチェックしているの。

(嶋教育長)

チェックは本人です。申告です。

(こども教育課長)

外部のアドバイザーを入れたりしているのは、全国では何箇所かモデル都市でやっている例はあります。

(中貝市長)

リクルートは城崎に入ってきたときには、確か最初は無料で入ってきたんです。でも、それはここでできたら他で儲かるということなので。学校なんかでもいい仕組みができれば、もう日本中で儲かると思うのだけれど。

(中川委員)

学校現場は市の職員あたりと違って、もちろん改善しないといけないことがいっぱいあるけれども、いちばん手がかかるというのは不登校の子の対応とか、あと特別支援を要するような子は1つ歯車が違っちゃうと、もう1日狂っちゃうというところがあるので、そうすると子どもが帰ってからやるべきことをする必要があるので、どうしても勤務時間が増えてしまう。そういうことが一般の会社と違うと思います。

(深田委員)

前の時にもちょっと言ったと思いますが、学校というのは良いか悪いかは別にして、学校文化的なものがあって、その学校文化というのは何かと問われたら、先生方もこれが学校文化だとは、なかなか定義ができないけれども、1つは自分たちが関わっている人育てというのは合理化できない非合理的な部分があって、それが人育てだ、みたいなどころがあるのかもしれない。

(中貝市長)

文化がやっかいなのは、体に染み込んじゃっているのです。文化の定義ってあるのです。その

社会の中で支配的に行われている行動様式で、なおかつ世代を超えて伝わっているもの。だから歴代こうなんですよと言って、しかもそれが文化であればあるほど客観ができない。それはむしろ「わー、驚いた」と見るぐらいで見ておいたほうがたぶんいいのだろうと思います。文化ってどの組織でもあって、電通は電通のああいう無茶苦茶な文化があって、自殺者を出したりするのだけれども、それって本当に変えられないのかというと、そんなことはなくて、残業0にしたって成績は上がったという、そんなことはざらにあるわけです。本人たちなので気づかないということがあるのではないかな。こういうものを今度、あれは何だっけ…。所得の低い家庭の子どもたちの就学を援助する制度の管理をするのに…

(教育次長)

就学援助システム。

(中貝市長)

もちろんあれは今、手作業でやっているから、ケアレスミスがあるかもしれないと言っているけれども、昔からこういうもののシステムって、入れたら本当に人間は暇になったかということ、携帯でもパソコンでもそうで、みんな暇になった？全然なっていないね。全体でもっとややこしい仕事が入ってきて、だから単純に何かシステムを入れるとみんな時間ができて他のことをやれるかと言うと必ずしもそうではないということになって、まさに文化というのは価値観の問題だから、どこにその価値を見出すかということなので、あなたの価値はこんなものだというのを客観的に見せてもらうことをしたらいいのかもしれない。

(深田委員)

市長がおっしゃいましたように、成績処理1つにしても、もうすでにコンピューターを入れてすごく成績処理が早くなりました。今まで手計算でやっていたことを考えるとすごく早くなったけれども、早くなったからといって、それで軽減されたかということ、早くなったら早くなったで、それで出来た時間に教師はまた他のことを入れようとするのです。それはなぜ他のことを入れないといけないのかと言ったら、これはいろいろなものの見方の違いだと思いますが、学校というものの自体が以前とは違って外に開かれている。開かれた学校ということ言えば良いことだと思うのですが、その分、学校の説明責任というのがすごく問われていっているから、要求されるもの、例えば教育委員会から要求されるもの、管理職から要求されるものというのは、調査・記録などとして残していかなければならない。そういう部分も1つあると思います。もう1つは、先ほど中川委員がおっしゃったように、どうしても支援をしなればいけない子どもたちが増えてきているということになれば、人と人との交わりの中での支援というのは、教育には大きな役割があるのかなと思ったりすると、どうしても家庭訪問の回数が多くなったりして時間が取られることもあると思います。

(中貝市長)

やはり技術もあるのだけれども、価値のところだと思うのです。日本の企業はだいたい特徴的にがんばりすぎることがあったけれども、ポジショニングという言葉でも自分がどの分野で何をして稼ぐかということを明確にしないといけない。それに対して日本の企業は底力

はあるのだけれども、やたらとみんながんばっちゃう。典型例はマツダで、マツダはずいぶん景気が落ちたときにフォードから落下傘社長が下りてきて、30代だ、黒船だと大騒ぎになったことがあって、マツダはトヨタの向こうを張って、トヨタがやっているすべてのことをやろうとしてやっていた。高級車もやるし、家庭用の車もやるし、何とかもやるし、現場の力はすごく大きいものだけれども、マツダはもっと何をして何をがんばって何をがんばらなくていいのかをはっきりさせないといけない。エネルギーを集中させなければいけないということで、会社を変えていくのです。トヨタみたいなあんなに大所帯になってくると、すごい力があると別にいろいろな分野ができるのだけれども、それにしてもレクサスをやる時には大問題になって、つまりトヨタはどちらかと言うと超高級車を作るのではなくて、中級ぐらいだけれどもうちはそれを安くできるという、そこで勝負をしていた。それに対して、今度はレクサスを出そうとすると従来のトヨタの文化では合わないということで、わざわざ別のブランド作ってやったりとか。企業はそういうことをかなりぱっとやるのだけれども。フォードなんかははっきりしている。うちはこれしかやらないとか。それから、GEのウェルチさんというすごい経営者がいて、彼は1番、2番になれるものしかいらんと言っていたかな。競争がたくさんある世界はいらんとか、かなり明確に言っていて、何をやるかというより、何をやらないかをはっきりさせるということがずいぶん言われている。

行政もそうだし、学校現場もそうで、いろいろなことを言われるのです。みんな正しい。必要ないかというとなんなことはなくて、みんな必要なのです。例えば、海が白化していると、珊瑚礁が白くなっているだとかね、大問題だと。それはそうなんです。豊岡市がやるべきだということを議会が入れちゃったので、私は拗ねて「やらない」と言っていて、市長がやらないと言っているのを議会が勝手に修正して入れるということではできない、そういうことです。その白化現象に対応しなくていいのか、そんなことはない。ヤマビルは対応しなくていいのか。そんなことはない、やらなくちゃいけないですよ。そうするとみんないっぱい出てくる。それを今まではみんな「はい、やります。検討します」とか言ってくるものだから、だけどやれる人間って限られているわけで、職員の数しかいないわけだから。お金も限られているし。結局全部ががんばるのだけれども、1つ1つのがんばりが手薄になってしまっただけで成果は出ないという状況が起きてきていて、なかなか企業みたいに「うちはもう別に年寄りに買ってもらわなくてもいいのだ」と、企業の勝手ができるのです。「うちは若いやつしか相手にしない」とか、「お金持ちしか相手にしない」ということでも企業はいいのだけれども、役所はなかなかその思い切りはできない。できないのだけれども、どこかでやらなければいけないことがたぶんあると思う。

学校も父兄だとか、いろいろなところからいろいろな要望・要請を受けていて、みんな1つ1つはもっともなことなので、「そうですね、頑張りましょうね」とやっちゃって、それが今の教育を作り上げているとすると、「うちはやらないのです」とはっきりと、それは「～のことに成果を出したいというのが私たちの明確な目標であって、そこにエネルギーを費やすのです。従って、あなたのおっしゃっていることはよくわかるけれども、できないものはできない」と。そういう割り切りは、勇気がいるのだけれども、これは要るのではないかと思います。

(中川委員)

今の話に関連してですが、最近学校訪問に行ったある学校の校長先生が、「子どもの基本的な

生活習慣、これは明確に学校ではなく家庭の責任ですよ、ということを説明の中で今、強力に言っています」と言われた。私もびっくりしましたがけれども、気持ちの基本はそうですし、本当にそれぐらいの心意気で保護者と接している校長がいるのを知りまして、びっくりしました。

(嶋教育長)

それは優れた経営者だ。

(中貝市長)

なかなかそれは勇気が要るけど。

(中川委員)

要りますよ、それは。

(嶋教育長)

その話になりますが、そもそも論で、教育課程がどんなふうになら編成されているかということをお数カ国、調査した研究者がいて、ものすごく日本の教科外教科が多いと。特別活動とかクラブとか委員会とか、そういうのをやっている国はないです。しかもそれに生徒指導もする。そんなことをすべて学校が請け負ってしまって、今は食育だといって家での食事まで全部請け負って学校が学習させている。でもそれをなんとかしようというので、10数年前に実数を削減して焦点化したら、今度はゆとり世代だといってもものすごく批判を浴びた。また時間数を増やして、次の教育改革でまた時間を変えますって、どんどんどんどんスクラップができない。そんなことを言っても仕方がないのだけれども、もしもできるとしたら、さっきの話のように、地域の行事は地域にお任せする。その中で課題が出てきたら私たちが受けて、学校でできることをしていくのだけれども、地域に出かけると先生はいい先生で、校長もすごく理解があつてという、その信用はずっとあるのだけれども、それは教育委員会が声を出して、そうではなくてやらなければならないこと、やりたいことを焦点化するので、それは理解をお願いします、PTA もお願いします、というふうにして、そういうことはやっていけるのかなという気がします。それは時間数を調べたらものすごく差があるけれども、小さい・大きい学校に関わらず、かなりの土日の出勤であるとかが関わってきますので。

(中貝市長)

やはりどこかで思い切りが要りますね。

(教育次長)

まだ、もう1つありますので、この件は。キーワードとしては、何かをやるということではなくて、何をやらないかということをおきちつとすることです、客観的に。

(中貝市長)

一度リクルートに、こういう議論をしているのだけれども、どう思う？って、問題を投げかけてみて。ここに網を投げたらドジョウがいそうな漁場だと思うかどうかと。私はそう思うけれ

ども、だけど「いやあ、やっぱり学校はねえ」ということなのか、「見てきたけれども、とてもやっても成果が出るような分野ではありません。先生の数を思い切って増やすしかありません」と言うのだったら、わざわざやる必要はないわけで。けれども、もし彼らが関心を持ってどこかの学校1つでも一定期間、行動観察を徹底してやると、「それは面白いかもしれませんね」と言うのだったら、そこはまた話のしようがあると思う。もちろん教育委員会が受けるかどうかというのがありますが。別にリクルートでなくてもいいけれども、たまたま縁があるからね。「それ面白そうですね」と食いついてくるようであれば、1回試しにやってみるといい。課題が何なのかを客観的に。それはコンピューターのシステムを入れることで解決できるような話なのか、そうでないのか、あるいは、あなたが大切だと思っているかもしれないけれど、こんなことにこんな無駄な時間を使っていますよということが言えるかもわからない。ということ一度検討してみてください。

(教育次長)

わかりました。調整させていただきます。

(3) 学校現場の業務改善について

(教育次長)

続いて、市長から議題としてありました、高校との連携についてですけれども、教育委員会事務局から、今の高校との連携について、資料に基づいて説明させていただきます。

(こども教育課主幹兼指導主事)

資料No.3に高校との連携についてということで、まとめております。直接、教育内容について、ああだこうだということではなく、まずは市としての願いです。どのような子どもたちを育てたいか、そのための市の取組の狙いや、課題を取り組む状況が伝わるように、今やっていることの充実を図るということを前提で考えてみました。現在の交流の状況ですけれども、近隣の学校との交流ということで、そこに3つ例を挙げております。年間を通してずっとということではありませんので、例えば時期を絞ってとか、行事的なかたちで関わるというような交流があります。それから、教科指導に関する交流ということで、これも一部ではあるのですが、例えば理科、中学校の理科、高校の理科、それぞれの研究会に相互に参加をしていく例があります。また、高校によっては、高校の先生の授業力向上ということから、市の中学校の研究会に参加をするというようなことで、なかなか日程調整が難しい面もあのですけれども、案内を送って何人か先生が来られたということが始まっている学校もあります。高校で今こちらでわかる範囲で、豊岡市の小中学校の取組と並行した授業内容ということで把握している分で3校出ております。総合高校につきましては、おそらく市長が一番詳しいのではないかと思います。ですが、地域国際系列ということで、豊岡市の取組を踏まえた高校版の教育の展開、それから、平田オリザ先生によるコミュニケーション授業の展開に取り組んでおられます。それから、豊岡高校が今年2学期に、今まさにやっているところだと思うのですが、探究学習を、豊岡市の未来からの挑戦状ということで、関係部署から講師を招くようなスタートを切って、探究活動をしております。それから、出石高校も本格的には来年度以降になるかと思うのですが、平田先生のコミュニケーション授業に取り組んでいただきます。

というような現状を踏まえまして、今後に向けてですが、最初に言いましたように、まずは現在の取組の充実を図るということで、取り組んできている豊岡市の、例えばふるさと教育の内容であったりということだけではないのですが、高校からは豊岡から来ている生徒は対話的な学びに慣れているというような声も聞かれるようになってきておりますので、取組の成果としては、子どもの学び方に変化が見られるようなことがあると認識しております。各学校で取り組んでいる授業における5つの徹底継続実践事項ですとか、ふるさと教育、コミュニケーション教育などの充実を図ることで子どもたちの学び方、そのあたりの変化から成果が伝わるようにしていくということが1つ、もう1つが今あるつながり、先ほど言いました、交流ですとか、もともと中高は進学する生徒の情報の引き継ぎなどをしているのですが、そういうふうに一部分の交流でしかないけれども、そこを核にまず顔が見える関係を作っていく中で広げていく。今の交流の機会を核とした協力体制の構築、それから、連携の広がりということを意識して取り組んでいく必要があると考えております。

(教育次長)

市長のご意見を。

(中貝市長)

今まで私自身も高校は県立だからといって、私立もあるのだけれども、それにしても豊岡市立ではないのでというので、ほとんど視野になかった。だけど出石高校は出石高校でだんだん人が減ってすごく危機感を持って地域の人を巻き込んでやろうとしている。総合高校はこちらからお願いして地域国際系列を作ってもらって、幼稚園・保育園からずっと高校まで…今度、専門職大学もできるのだけれども、そういう一貫したものの見方というのがいるのだらうなという気がします。ところが、市教委と県教委で十分なコミュニケーションが取れていない。取れたらもっと何かいろいろと展開があるのではないかとという気がします。それから、近大が、何年前に私が行ったときに、中高がやはり生徒たちに「帰っておいで」みたいなことを言い始めた。これは他のところもそうだけれども、結局、追い出しているだけなのではないか、どうしても外に出ていって、「ノーベル賞を取ったら提灯行列で喜ぶで」みたいなこともあるのだけれども、それはそれでいいのだけれども、あまりに出ていくことだけをやってきたのではないかと。東井先生がおっしゃっている「村を育てる学力」ということに背を向けてきたという、そういうのは高校サイドにもあるのではないかとという気がするのです。それは、私たちが今、幼稚園・保育園から中学校までやろうとしていることとピタッと合うはずなので、ここを合わせる作業があるのではないかと。そここのところは今、市長が出て中学校、高校との授業を始めているのですが、こんなことはとっかかりであって、別に外に出ていくのを豊岡に帰れと言いたいわけではなくて、最初に言ったように、堂々と同じ選択肢に挙げられるように、ちゃんとそういう判断力というか、自己決定力を持った子どもを育てることからいくと、高校を放っておいていいのかという気がする。

今までも言ってきましたけれども、私は、県教委は規模が大きくて、個々の動きがなかなかできないと思う。それから、たぶん県教委は私たちが豊岡を好きなのと同じようには、兵庫県のことを好きではない、好きになりようがないと思う。豊岡だから豊岡の職員、豊岡の教職員、教育委員会も含めて、このまちが好きだという思いがあって、それをなんとか教育のほうに反

映できないかと考えているのですけれども、県教委はたぶんそれほど。兵庫県の職員もそう、私たちが豊岡を好きなのに比べると、たぶん県の職員は兵庫県のことを好きではないと思う。だけど、個々の先生たちには期待をしたいと思います。豊岡の高校にはもちろん期待をしたいから。そうだとすると、彼らは兵庫県全部をすぐ考えちゃうので、横並びしか言わない、口では各校特色のある高校なんて言っているけれども。成功しているところがあるとすれば、県教委と組んでいるのではなくて、例えば村岡高校は、まちと組んで寄宿舎などを用意して、おいでと言っているから、10何人来ていると。結局はそこだと思うのです。問題に対する切実な捉え方が、神戸にいて兵庫県全部考えたらわからない。そこは私たちがいちばん近いところにいるわけで。だとすると、やはり高校との連携、少なくともコミュニケーションをもっと強めるということは、私は要るように思うのです。

(深田委員)

委員会会議でもこの話が出たこともあるのですが、やはり先生方同士の交流がなかったら、なかなか垣根というか、枠を取ることはできないというような話が出ています。授業研究については、今ここで説明されたようなことで、教科によっては積極的に交流し研修に参加したりしています。豊岡の小中一貫の中で9年間のカリキュラム、それを高校につなげるということになれば、これはできるかできないか筋違いなお願いと思いますが、豊岡のそういう教育を経験してきた校長さんが豊岡市内の高校の校長になって、しっかりとつないでいくということがあってもいいのではないかと思います。採用の基準が違うということもありますが、高校の教員免許を持っていなくても小学校・中学校でやっておられた人がしっかりとやられるというのもいいかと思います。

(中貝市長)

平田オリザさんからつないで状況を変えられそうな気がしますね。体が持つのかなと思うけど。

(嶋教育長)

でも、豊高の岡田校長がPTAの会合で言っちゃいましたと。帰ってこいと親は言ってくれという話をしたと。それは、豊岡のやり方を酌んでくれているということだし、なぜ岡田校長が言えたのかと私が考えると、今総合も豊高も出石も日高も、みんな但馬出身の人が校長になっているのです。だから、ここの文化だとか小中の有り様がわかっている。そうでなくて、それが神戸や向こうのほうから何年間か来て帰るとなると、そういうコミュニケーションはほとんどできない。それはこっちから言えることではないのだけれども、それはすごく大きいと思います。

(中貝市長)

高校の校長さんというのは、例えば但馬でも豊岡でも仲は良いものですか。個人的なという意味ではなくて、豊岡だったら教育長がいて教育委員会があるので、校長さんらがしょっちゅう会って意見交換されるでしょう。高校はどうなのだろう。

(中川委員)

市内の国・県・市の機関の代表者がメンバーとなっている「豊和会」がありますね。今、教育長にお聞きすると、既に豊和会でのスピーチは終わったということです。各高校の校長が来られますから絶好の機会だったのだけれど。また次にスピーチが回ってきたら是非お願いします。

(中貝市長)

平田さんがもうちょっと関わるようになったときに、平田さんを軸に1回、豊岡市内の校長さんで集まりませんかと言って、ワーワーやり合うのもいいのではないですかね。入試改革を考えると平田さんの方向にいかざるを得ないという現実的なことがあるので、学校が比較的動きやすいのではないかという気がします。結局、豊岡はもうすでにやってきていることです。

[日程4 その他]

(教育次長)

その他ですけれども、もしありましたらもう時間もないのですが。市長にとか、市長からとかありましたら。

(中貝市長)

方向性の確信みたいなものがだんだん教育委員会の皆さんは見えてきて、かたちが見えてきているというのはすごくいいことです。だからここはもう畳みかけるということです。教育はただの英語を教える英語教育ではないということもはっきりと言えますし、何かいろいろなものをゴロゴロと転がすきっかけとか、推進力になるような気がします。ローカル&グローバルというのは。そう思いました。

[日程5 閉会]

(教育次長)

時間になりましたので、これをもちまして、平成29年度第2回豊岡市総合教育会議を閉会いたします。

----- 閉会 午後3時30分 -----